

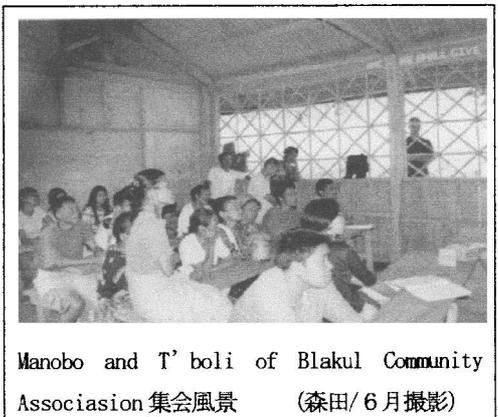
\* ブラクール訪問記 \*

ブラクール・コミュニティは、マノボ民族とティボリ民族が共存しているところです。小学校とハイスクールを住民組織が運営しています。運営資金はアメリカの助成団体から約50%、日本のNPO法人（この6月からはHANDS）から約30%、そして残りを住民の授業料等でまかなっていて、先生たちの給料と給食プログラム、教材費に使われます。現在は、かなりカツカツのなかでやりくりしているので、なんとかしてコミュニティ自体で収入を増やし、先生たちの給料の値上げ（現在は公立校の4～5分の1）と、教材の充実、そして援助金をもらわずに運営していけるよう、話し合いが行なわれています。

ブラクールは、空港のあるジェネラルサントスから車で1時間半のところにあるスララという町から、バイクで2時間半くらい登り、そこから歩いて30分くらいのところ。こう書くと、たいしたことのない道中のように思われるかもしれませんが、かなり大変なのです。バイクで行く山道も、途中からはかなりの砂利道で、また山は天候が変わりやすく、私たちは往復とも雨に濡れてしまいました。バイクを降りてからの道は粘土質のぬかるみで、私は今回も、「どうして人々はこんなところに住んでいるのだろうか？」と調べてしまいました。毎回いろんなコミュニティに行くたびに不思議に感じることで。着いてしまえばのどかで天国ともいえる村の風景が広がり（それは私が住んでいないからなのですが）、そこに住む人たちのこだわりもわかる気がするのですが…。

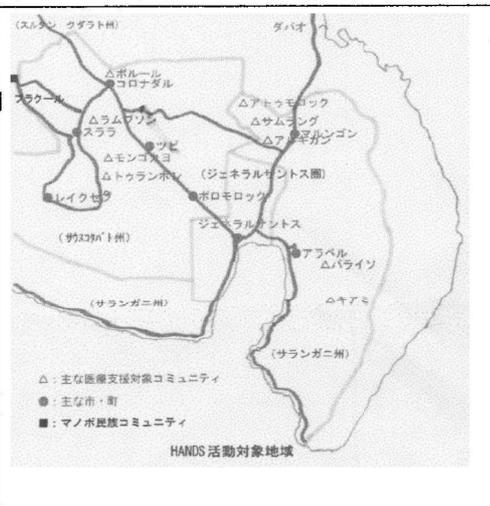
村人たちの職業は、他の先住民同様ほとんどが農業です。しかし、換金するためのマーケットまでの道が悪いので、よっぽどの収穫がないと馬や水牛の運び賃で終わりとなってしまいます。

現在、村住民組織で会議を持ち、この地域にあった独自の収入プロジェクトを持つために検討を重ねています。雨が多く涼しい、粘土質の土地にあったものを組織で所有し、メンバーが日替わりで働くことによって村としての収入を確保し、学校運営や村としての生活向上（例えば医療の問題など）を考えています。しかし「将来の生活設計」について考える、という訓練を受けてきていない村人たちにとって、これはかなり時間のかかる計画となります。先のことを考える、ということは、教えればすぐ出来る、というものではないからです。この住民組織を、経済的・精神的自立に向けてサポートしている現地NGOであるPFPのスタッフたちの粘り強い、長期的展望の指導によって少しずつ前に進んでいる、というところです。



Manobo and T'boli of Blakul Community Association 集会風景 (森田/6月撮影)

私が4年ほど前に訪問したときに会った先生で、現在も続いているのは1人だけでした。メリサさんといって、先住民ではないのですが、もともとこの近くに生まれ育ったのもあって、マノボ語もでき、この先もこの仕事を続けて、先住民の発展に少しでも力になりたい、と語っていたのが印象的な、小柄で愛らしい女性です。また、この土地に学校があることの意義を、「この数年で生徒数が増えてきているのは、この地域だけでなく、他の地域に住んでいる先住民の子どもたちがこの学校で学びたいと思っているからです。公立校などでは、先住民に対する差別がまだまだ根深いですし、授業料などの経費も高く、支払いが困難です。私はここで子どもたちに先住民としての自尊心を高める教育をしたい」、と語ってくれました。どんな田舎に住んでいても、資本主義経済の波からは逃れられないフィリピンで、こんなに安い給料で8年以上も先生として、またコミュニティの相談役として、いつもニコニコ活動しているメリサさんに、私はそのとき、「ありがとう」という言葉しか伝えられないのでした。



日本にいる私たちができることは、私たちの考えの押し付けでない「継続的な励ましや見守り」、そしてわたしたちが経済的に発展してきた裏にある「搾取している現状をきちんと学び、何かしらの働きかけをすること」、また同じ時代に生きる、違う文化や生活を知っていくこと、などいろいろあります。この日本という土地に、たまたま生まれた私たちだから出来ることがある喜びを、HANDSを通して共有していきましょう。

(事務局ボランティアスタッフ・森田奈美)

~~~~~  
 ブラクールは過去8年間にわたり「少数民族里親の会 (FOT)」の支援を受けてきましたが、この度、諸事情により私たち HANDS がその活動を引き継ぐことになりました。FOT 会員もその約半数が支援継続を約束して下さいました。昨年の8割並み支援が出来そうです。ご協力に感謝いたします。(事務局)